

学校の概要

山形市立第六小学校									
	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊学級	計	教員数
学級数	3	4	4	4	4	3	1	23	34
児童数	79	103	101	108	107	115	3	616	

実践研究の概要

1. 研究主題

共に育つ教育課程の創造
 ~ 確かな学びの成立をめざす授業改善 ~

2. 研究内容と方法

(1) 実施学年・教科 < 全学年・全教科 >

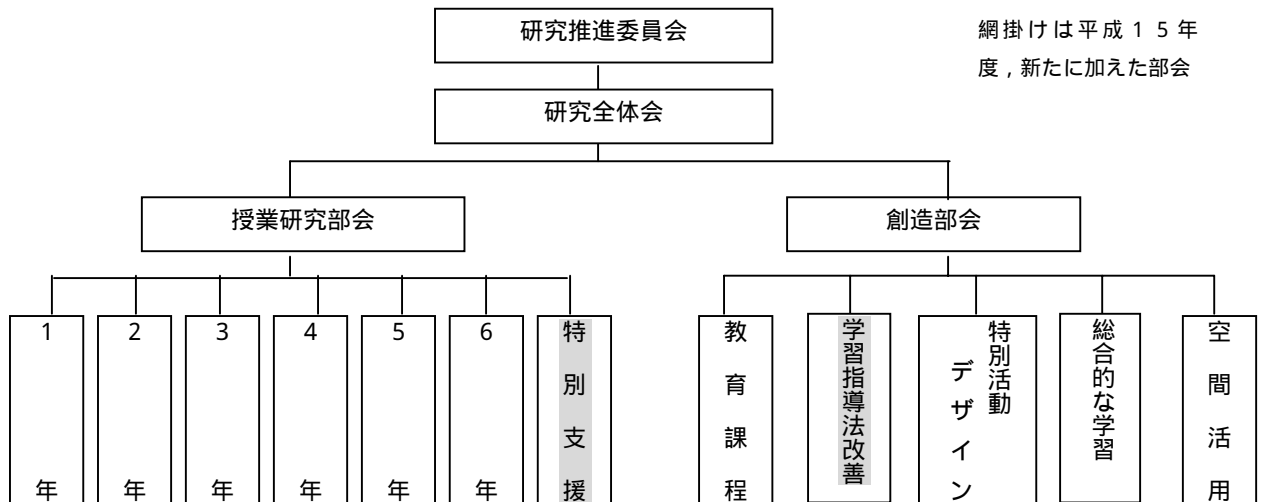
学校教育目標を踏まえ、教育課程のあらゆる場面で「追求」「発信」「交流」を重視した教育課程を仕組み、仲間と共に育つ「自立」した子どもの育成を目指している。また、全職員で全児童を育てるということを教育課程の中核に据えているため。

(2) 年次ごとの計画

平成十四年度	<p>ア テーマ：共に育つ教育課程の創造</p> <p>イ 仮説：「追求」「発信」から「交流」への広がりを重視した教育課程を仕組み、学習活動や様々な体験を通して「確かな力」を身に付けることにより、仲間と共に育つ「自立」した子どもが育成される。</p> <p>ウ 研究内容・方法（ は重点） 教育課程の編成 ・個に応じた指導のための指導体制の工夫 個が生きる学習形態や指導法の改善 ・基礎的・基本的な学習と補充的・発展的な学習のための指導計画や教材の選択・開発 授業研究会を中核とした研究の推進</p>
平成十五年度	<p>ア テーマ：共に育つ教育課程の創造</p> <p>イ 仮説：「追求」「発信」「交流」場面を意図的に単元構成や指導場面に取り入れ、子どもの主体的な活動と学びの過程を重視しながらきめ細かな指導を行えば、ひとりひとりに基礎・基本の確かな定着が図られる。</p> <p>ウ 研究内容・方法（ は重点） (1) 教育課程の編成 ・ゆとりと充実のための日課表の工夫 ・子どもが生きる通知表の工夫 ・関わりを充実させるためのキッズタイムの充実 (2) 追求・発信・交流を重視した授業改善 個が生きる学習指導と学習形態の改善 基礎的・基本的な学習と補充的・発展的な学習のための指導計画や教材の選択・開発 (3) 個に応じた指導のための指導形態の工夫 (4) 公開研究会による研究成果の発信 副題を変更したため、授業改善にポイントを置いた仮説を立てた。</p>

平成十六年度	<p>ア テーマ：共に育つ教育課程の創造</p> <p>イ 仮説：「追求」「発信」「交流」場面を意図的に単元構成や指導場面に取り入れ、子どもの主体的な活動と学びの過程・評価を重視しながらきめ細かな指導を行えば、ひとりひとりに基礎・基本の確かな定着が図られる。</p> <p>ウ 研究内容・方法（ ）は重点）</p> <p>（１）教育課程の編成</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ゆとりと充実，学力向上のための日課表の工夫 ・子どもが生きる通知表の改善 ・関わりを充実させるためのキッズタイムの充実 <p>（２）追求・発信・交流と評価を重視した授業改善</p> <p>個が生きる学習指導と学習形態の改善</p> <p>基礎的・基本的な学習と補充的・発展的な学習のための指導計画や教材の選択・開発</p> <p>一人の児童がより多くの教師と関わる指導体制を確立し，より多面的な児童理解と評価，それに基づく指導の展開</p> <p>（３）研究協議会による研究成果の発信</p>
--------	---

(3) 研究推進体制



平成15年度の研究成果及び今後の課題

1. 研究成果

子ども同士や子どもと教師の交流を深めるために，日課表を工夫し，朝の「ふれあいタイム」やロング昼休み，月2回のキッズタイムを設定した。また，学級を開く学習指導体制の工夫や通知表への「あなたに拍手」など，“全職員で子どもを育てる”という取り組みを積極的に行ってきた。多くの人々と関わりを持つことで「学校に来るのが楽しくなった」と答える児童が平成14年度には78%だったのが86%になった。

追求・発信・交流を意図的に年間単元配当表や単元構成・授業場面に取り入れることにより，子どもの変容を常に意識しながら授業改善を進めてきた。追求意欲を高める教材分析や教材提示の工夫が日頃から行われ，子どもが生き生きと学習に向かう姿や自己の学びを深めようとする姿が見られるようになった。また，発信についても，話す力・伝える力の高まりが実感できるようになり，これらは公開研の感想の中にも多く見られた。本校教師のアンケート結果でも，児童の「学習に対する興味関心や意欲」は41.7%から61.1%と徐々に上がっている。ひとりひとりに確かな学びを成立させ，基礎・基本の定着を目指して課題選択別や習熟度別少人数指導，TTによる指導，教科担任制や交換授業などを積極的に取り入れてきた。個に応じた指導を通して，学習することの楽しさや学び方を身につけることができた。習熟度別少人数指導は全学年で実施した。保護者からは「子どもが学校のことをよく話し，複数の教師による指導が行われていることが分かる。」「少人数学級にTT指導を組み合わせると，授業のバリエーションが多くなり，学力の向上につながる。」「子ども同士がお互いの個性を尊重

している様子がわかり、画期的な取り組みである。」と高い評価を得ることができた。サポートスタッフ制を取り入れ、地域やボランティアの方々等学習に参加していただく場を数多く設定した。豊かな実体験を持つ方々との関わりにより、学習に対する高まりと深まりが見られるようになった。

2 研究の課題

子どもの学びの姿をより確かなものにするためには、今後、絶対評価の考え方に立つ評価のあり方に焦点を当てて研究を深めていく。

追求・発信を生かし、交流による学びの質をいかに高めるか、また、そのための手だてや教師のコーディネート力を模索しながら授業改善に努める。

基礎・基本となる学力を定着させるために、個に応じた手だてや支援のあり方を検討し、今まで以上に細やかな指導を心がける。また、学習内容と学習形態の関係、効果的なTTなど協力的な指導についても明らかにしていきたい。

学力等把握のための学校としての取り組み

- 1 定期的な学力調査の実施（4月のNRT，2月のCRT）
- 2 少人数指導に関する児童・保護者へのアンケート

フロンティアスクールとしての研究成果の普及

- 1 H15・公開研究会，H16・研究協議会の開催
- 2 研究成果普及のための活動実績
 - ・龍山会（学区小中連絡会）への発信
 - ・県内外の研究会参加
 - ・学校訪問を受け，来校者への発信
 - ・講師依頼を受け，他校へ出向いての発信
- 3 研究成果の普及活動の成果

< 公開研究会の中から >

- ・研究の内容がよく整理されている。構想図もシンプルでわかりやすい。低・中・高の向かう方向がはっきりしていて、授業でその姿を見ることができた。
- ・子どもの学びの姿勢がとても意欲的。どの子どももしっかり課題に向かっていった。
- ・子どもの思い、主体性を大事にした授業作りがよく見えていた。導入の5分間を大切にしたい授業作り、特に教材の提示に工夫が見られた。教師の演示も工夫され手際よく行われていた。
- ・体験学習の持つ大きな役割がよくわかった。聞いたり読んだり想像したりするだけの学習ではなく、体験から生まれた自分の課題、体験から広がる自分の思いなど、体験は子どもの思考をつないでいるということを考えさせられる授業だった。
- ・課題選択学習をしているのに、最後にクラスを移動してお互いの学習内容を補い合う交流をしていた。つながりのある選択課題の設定は教材分析の力だと思う。
- ・通級指導は障害にだけ焦点を合わせて治療するのではなく、子どもを全人的にとらえ、教師と子どもの関わりを通して言語指導を研究している。

次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

- | | | | | |
|----------------------|--------------|----------------|--------|------|
| 【新規校・継続校】 | 1 5年度からの新規校 | レ 1 4年度からの継続校 | | |
| 【学校規模】 | 6 学級以下 | 7 ~ 1 2 学級 | | |
| | 1 3 ~ 1 8 学級 | レ 1 9 ~ 2 4 学級 | | |
| | 2 5 学級以上 | | | |
| 【指導体制】 | レ 少人数指導 | レ T・T による指導 | | |
| | レ 一部教科担任制 | レ その他 | | |
| 【研究教科】 | レ 国語 | レ 社会 | レ 算数 | レ 理科 |
| | レ 生活 | レ 音楽 | レ 図画工作 | レ 家庭 |
| | レ 体育 | レ その他 | | |
| 【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 | | レ 有 | 無 | |